

20: 離れはいかにあるべきかについて

会が完成されると離れが生じる。体の中筋から左右に開くように伸張し、気合いの発動と共に自然に離れるようにする。

会においてこれ以上押し引き出来ずに伸び合いの最高の状態に達したら、射法の基本を守って矢所を考えず、思い切って離れることである。これを繰り返し練習することによって意識的な動作が意志の伴わない動作になり、自然な離れとなる。

会での詰め合い・伸び合いの後、胸の中筋より左右均等に、葉末の雨露が落ちるように自然に離れるべきである。

21: 残身の重要性について

離れによって射は完成されておらずなお残されたものがある。精神でいえば残心、形でいえば残身である。

残心は離れの結果の連続であるから離れの姿勢を崩さず、気合いのこもったまま天地左右に伸張し、縦横十文字の規矩を堅持する。

そののちすべて残心に含まれるという気持ちで弓倒し、物見を戻す。射が立派に完成された時は残心も自然に立派になり弓倒しも生きてくる。

残心の善し悪しによって射全体の判別ができ、射手の品位も反映する。

さらに残心は行射の時に限らず起居進退すべての動作に伴わせることが大切である。

22: 失のときの心得について

射を行う場合、過って失策をすることがある。これを失という。

いずれにせよ、失をしたときは、畏まり、慎む気持ちをもって動作することが肝要である。

①弓を取り落とした場合

すぐ近くに落ちた場合は、弓に近い方の足に片方の足を寄せ跪坐し、または膝行して弓を取る。遠くに落ちた場合は、同じ様に足を寄せ、弓の近くまで歩行し、跪坐して弓を取り、射位に復する。

②弦が切れた場合

身近にあるときは、その方に足を寄せ跪坐しまたは膝行する。遠くに飛んだときは同じく足を寄せ、その位置まで歩行して跪坐する。その後、矢を左手に移し、弦を拾って左手に持ち右手で輪にまき、弓に持ち添え、矢を右手にとって射位に復し、他の人を配慮し、恐縮の意を表して間のびしないように後退する。

③筈こぼれの場合

取懸け後の射の行為中に筈こぼれした矢は、射直しをしないことが原則である。